【主題】ボランティア活動から探究学習への深化

【副題】「館高防災ジュニアリーダー」による地域貢献活動と平和学習

【学校・団体名】宮城県泉館山高等学校
【役職名・氏名】主幹教諭　平野　茂

1　概要

本研究は、本校で令和６年度よりボランティア活動として開始した地域防災活動「館高防災ジュニアリーダー」の実践を起点として、生徒の探究学習がどのように深化したかを述べたものである。

2　本校の教育と総合的な探究の時間

本校では、令和２年度から「さまざまな社会変化が起こると予想される未来社会を見据え、自ら課題を見出し、主体的に解決する姿勢を備え、地域社会や国際社会の創造に貢献できる人間」の育成を目指し、グランドデザイン「大志 2030」を実践している。「大志 2030」では、「自分と向き合う力」「相手と向き合う力」「社会と向き合う力」の３つの力を柱とし、その具現化に向け、各種教育活動をとおして、①言語力 ②対話力 ③情報分析力 ④思考力 ⑤判断力 ⑥発信力 ⑦実践力 ⑧協働力 ⑨課題解決力の９つの力を館高力と総称して養成している。

また、これまで本校は、多方面において地域を牽引する人材を輩出してきたが、総合的な探究の時間において、「地域との関わりを重視することで、新しい時代においても地域でリーダーシップを発揮し、活躍する人材を育成する」ことを目標としている。各学年のねらいは以下のとおりである。

【1 学年（課題発見）】探究学習のサイクルを学び、実際に経験することで課題を見出し、実社会に生きる課題解決力や社会を生き抜くための資質・能力を育成する。

【２学年（課題探究）】自分の興味・関心に基づいた探究活動を深め、社会課題等とつなげ、SDGs を「自分ごと化」する。プレゼンテーション、研究報告書の作成等により、論理的に他者に伝える表現方法を学ぶ。

【３学年（課題追究）】自分の探究についてまとめ、探究課題論文を作成する。今後追究したい内容について、さらに構想を深め、学修計画書や志望理由書を作成することで、自身の探究活動を未来につなぐ。

3　本校の地域貢献活動

これまで、本校では、吹奏楽部や家庭部、応援団チアリーダーなどが、それぞれ地域から要請を受け、各種イベントに参加するなど、様々な形で地域貢献活動を行ってきたが、令和６年度からは「館高防災ジュニアリーダー」が主体的に地域防災活動等を実践している。

4　「館高防災ジュニアリーダー」の活動開始

本校では、令和６年度から、仙台市泉区『地域・高校連携による安全安心まちづくり事業』の一環として、認定NPO 法人まちづくりスポット仙台のサポートを得て、地域と連携した防災活動を行うこととなった。そこで、「地域連携や防災に興味がある」生徒を募ったところ、１年生から３年生の１２名の生徒が集まった。その生徒たちを『館高防災ジュニアリーダー』と名付け、同年度６月から活動を開始した。

具体的な活動として、仙台市地域防災リーダー(SBL)をファシリテーターとして、「地域防災について考える」というテーマで、地域の方と複数回にわたって意見交換会等を行った。その意見交換会の中で、地域の方々の生の声やSBL 佐藤美嶺様の話を聞き、生徒は防災に関する知識不足を痛切に感じることで、同年度１１月に泉区長命ケ丘地区町内会の防災訓練に、運営側として主体的に参加することとなった。

図１　地域との意見交換会の様子

図２　長命ヶ丘防災訓練の様子

そうした活動をとおして得た大きな収穫は、安全安心なまちづくりの担い手として、本校生徒への地域の期待の高さを肌で感じることができたことである。そして、この防災ジュニアリーダーの活動に参加していた当時１年生たちが、高校生も地域の一員であることを強く自覚し、令和７年度から各種防災訓練の機会などを利用して、地域の方と関わり、地域住民向け防災対策教室等を開催しながら、地域の防災意識を向上させていった。こうした、生徒たちの気づきや学びへの意欲、そして実践が、すなわち、本校の「地域課題」について考える総合的な探究の時間「館プロ」につながっていった。

５　探究学習へ深化

令和６年度のジュニアリーダーとして活動した経験から、生徒たちは、令和７年度の総合的な探究の時間「館プロ」において、「高校生の視点から考える地域防災」というテーマで課題探究学習を始めた。

具体的には、防災においては「地域や専門家とつながりを持つ」「地域の防災意識を向上する」「災害時の問題点を解消する」ことが必要だと感じ、それらを目標に令和７年度の活動を開始した。

まず初めに、「地域や専門家とのつながりを持つ」ために、まちスポ仙台の協力を得て、６月２９日に泉区黒松地区の防災イベント「防災アドベンチャー」に参加した。そこでは、現役の医学生によるNPO法人「災強のすけっと」の中心メンバーとともに活動し、「災害時に高校生ができること」について改めて考えることができた。また、泉区将監地区に新しく整備された公園において、地域の人たちと学ぶ企画を考えて欲しいと依頼を受け、そのオープニングイベントに運営側として参加した。そこでは、将監ふれあい公園管理運営委員会のイベント責任者の方から、地域においてイベントを開催する際の課題について教えていただいた。さらに、泉区長命ケ丘地区の防災訓練に継続参加する前に、地域の方々と防災について意見交換会を開催したが、その中で、長命ケ丘在住の仙台市地域防災リーダーである、金沢竜助様と関わることができた。この金沢様との出会いが、生徒たちの防災への取り組みをさらに加速させることとなった。

次に、「地域の防災意識を向上する」「災害時の問題点を解消する」ためにどうしたらよいか、ということを話し合うために、地域の方や防災士の方だけではなく、宮城教育大学高野薫教育支援コーディネーターや同大学のゼミの学生にも参加していただき、意見交換会を開催することとなった。

その意見交換会の中で、地域の方も参加可能な本校のPTA行事において、防災ジュニアリーダーが主役となり「防災教室」を開催してはどうか、という意見が出た。その後、地域の方や保護者に何を伝えたら「地域の防災意識が向上し、災害時の問題点を解消する」ことができるかについて話し合ったところ、生徒からライフハック（日常生活で役立つ工夫やアイデア）について探究したいという声が上がるとともに、参加した方が楽しく学びに参加できるクイズを企画したらどうか、というアイデアが出た。

生徒の中には、令和６年度の活動の中で、災害時のトイレ問題に興味を持ち、探究学習をしている生徒がいたので、そうした生徒を中心として、段ボールとペットボトルを利用した手作りトイレの製作に取り組んだ。また、様々な災害時のライフハックの情報収集を進める中で、実際にやってみる人は意外と少ないのではないか、という分析があり、課題創出のために、ペットボトルを使った簡易ランプ、ゴミ袋を使った簡易カッパ、新聞紙を使った簡易布団、尿素を使った手作り保冷剤、食パンの袋を使った防臭袋など、様々なライフハックの作成を試みた。すると、ライフハックの中には、実際の使用が困難なものがあることが分かった。防災教室においては、それらの課題を改善した形で紹介することとなり、生徒たちは主体的に夏季休業を利用して様々なシミュレーションを行った。

問題点を解消したライフハックのアイデアを、令和７年１０月２３日のPTA行事で紹介し、約１５０名の地域や保護者の方にアンケートを実施したところ、「防災教室において防災意識は高まったか」という質問に、５８％の方が「とても高まった」と回答した。

図３　防災教室での発表の様子

６　探究学習を進めていく中での深化

（１）台湾の高校生との交流をとおして

本校では、国際交流事業の一環として令和７年１０月２４日に台湾高級中学教員団の訪問を受け、１２月３日には台湾国立竹東高級中学の生徒との交流会を行った。

防災ジュニアリーダーの生徒たちは、各々が交流会に興味を持ち、積極的に参加を申し出た。そして、交流会前に、台湾の歴史について主体的に学習し、台湾は、戦争や紛争の歴史を経て、現在の平和的な民主社会を形成していることを学んだ。また、その交流会においては、防災等をテーマにしたディスカッションが行われた。ある台湾の高校生の「誰も亡くなって欲しくはない。戦争も災害も起こらないことを願う」という趣旨の発言が、本校の防災ジュニアリーダーたちの探究学習をさらに深めるきっかけとなった。

図４　台湾との交流行事の様子

（２）「命を守る」という観点から平和学習へ

この台湾との交流会を契機として、生徒たちは防災と平和の関係についてさらに熟考することとなった。「命を守る」という点で、防災と平和は共通していることに気付き、平和を維持することも災害に備えることも、人の命を脅かすリスクを減らし、安全な環境を維持することになる。防災では災害に備える行動（避難訓練や防災グッズの準備）が必要である。一方で、平和も同様に、戦争や紛争を防ぐための外交努力や対話が不可欠である。災害時には地域の連携や協力が命を守る。平和も、国や文化を越えた対話や協力が基盤になる。生徒たちは、令和６年度からの防災ジュニアリーダーの活動をとおして、危険なことや重要なことを「伝えること」の意味を強く感じることができた。そこで、その時点で行っていた探究学習の内容をさらに発展させて、戦後８０年を迎え、高校生である自分たちが戦争の悲惨さを体験した方から次世代へと「伝えること」が必要であると考えを深めた。

（３）平和学習における地域人材の活用へ

地域の方との情報交換会をとおして、生徒が地域防災から平和についても考えるようになったことを伝えると、「戦争を体験した方が地域にいるので話を聞いてみたらどうか」というアドバイスをいただいた。そして、令和７年１２月８日に、９０歳になられる長命ケ丘在住の熊谷様にインタビューをさせていただいた。実際に話を伺うと、熊谷様のお気持ちやその体験の背景がはっきりと見えてきて、生徒たちは、改めて戦争はしてはならないと強く感じた。そして何より、９０分を超える話の中で、熊谷様が何度も繰り返し使われていた「ありえない日常」という言葉が、生徒の印象に強く残った。また、「戦争を無くすにはどうすればいいか」という質問に対して、熊谷様は「戦争は無くならないと思う」とおっしゃった。私たちは簡単に「戦争を無くす」と言うが、実際に戦争を体験された熊谷様のこの言葉には、テレビや新聞などで報道されているものと違う「重み」があった。そして、その言葉が生徒たちの心を動かし、次の行動へつながっていくこととなった。

図５　戦争体験者へのインタビューの様子

（４）高校生フォーラムでの発表をとおして

生徒たちは、戦争を繰り返さないためには、熊谷様の話の「重み」を直接感じた自分たちが中心となって、戦争の悲惨さを伝えていかなければならないと考えた。そこで、戦後８０年の節目の年に、高校生同士が平和について考え、話し合う機会である「みやぎ高校生フォーラム」において、代表校として発表することを生徒たちは希望した。そして、令和８年１月２４日に開催されたフォーラムにおいて『伝えることの大切さ～戦争体験者のインタビューをとおして考えたこと～』というテーマで、同年代の宮城の高校生たちに、戦争に関して自らが考えたことを伝えた。

生徒たちは、防災ジュニアリーダーの活動をとおして、本当に大切なことを伝えるとき、そしてその思いを受け取ったとき、人は強くつながることを学んだ。「戦争は無くならないと思う」という言葉の直後に「もちろん無くなってほしい」と話した熊谷様の経験や思いを伝えていくことで、さらなる人と人とのつながり

を作っていくことができると考えた。また、自分たちが実践している、防災や平和に関する「本当に大切なこと」を伝えながら、人と人とをつなぐこうした小さな活動が、やがて国と国のつながりを生み出す大きな流れをつくることとなり、平和な社会を形成するのに何よりも大切である「平和な日常」を生み出すと信じている、という趣旨の発表を行い、参加者から高い評価を得た。

この高校生フォーラムでの発表を機に、生徒たちは「高校生である自分たちの思いを直接伝えたい」という思いをさらに強く持つようになった。

その後、自分たちが発表できるイベントを調べ、生徒自身で申し込みを行い、令和８年２月マイプロジェクトアワード宮城県Summit、３月仙台防災未来フォーラム、同じく３月泉区長命ケ丘地区のNPO法人まちスポ仙台が主催するイベント「みんなで遊防災」、６月に尚絅学院大学主催の「SDGｓマルシェ」など、様々な機会をとらえて発表を行った。なお、これらのすべてのイベントで同じ発表を行ったわけではなく、イベントの主旨などを踏まえて、来場者に伝わりやすいように工夫をして発表を行った。

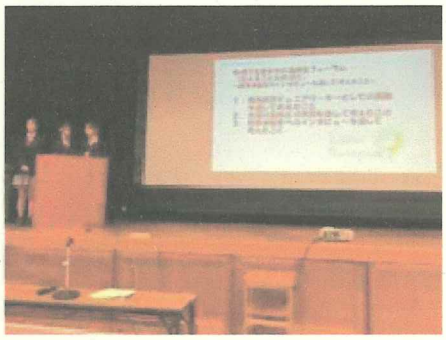

図６高校生フォーラムでの発表の様子

図７仙台防災未来フォーラムでの発表の様子

７　成果

本校における防災ジュニアリーダーの取組は、当初、教員が地域連携の機会を整え、生徒と伴走しながら進めるボランティア活動として始まった。しかし、その経験をとおして生徒自身が地域課題を自分ごととして捉え、主体的に探究学習へと発展、深化したことに、本研究の意義がある。生徒たちは、意見交換会や地域の防災訓練等において地域の期待や課題に触れたことで、「高校生として地域に貢献したい」という思いを持つようになり、総合的な探究の時間「館プロ」において、自らテーマを設定し、地域・専門家・大学・海外の高校生など多様な外部人材と協働しながら学びを深めていった。特に、台湾の高校生との対話や、戦争体験者へのインタビューをとおして、生徒たちの探究は「防災」から「命を守る」というより普遍的なテーマへと拡張した。これは、単なる課題研究の深化ではなく、他者の経験や言葉の「重み」を受け取り、それを次世代へ伝えようとする倫理的な姿勢の形成である。生徒たちは、地域の防災意識向上を目指す活動から、平和の尊さを伝える活動へと自ら学びを発展させ、その成果を高校生フォーラム等で発信するに至った。

以上の過程は、探究学習が「与えられた活動」から「自ら創り出す学び」へと転換する瞬間を示している。教員が伴走して始まった地域ボランティアは、生徒の主体的な問いと行動によって、地域と世界をつなぐ学びへと深化した。本校が掲げる「大志2030」の３つの力、そして９つの館高力の育成が、実践をとおして確かに結実しつつあることを示す事例である。

８．今後の課題

今後も、生徒が自らの経験を起点に社会とつながり、新たな価値を創造していく探究の姿を支えていくことが、本校の重要な使命となる。ただし、本事例は、生徒の体験に学校が関わるボランティアだったことから、教員が状況を把握して、精力的な生徒に伴走しながら探究を進めることができた。この最初の伴走の段階で、生徒の疑問点に対して適宜ヒントを与えたり、課題について意見を交わしたりしたことが、探究を深化させたことは言うまでもない。生徒の経験が社会とつながる場面での適切な教員の伴走があれば、そこから生徒たちが自走をはじめ、新たな価値を創造していくという流れが生まれる。しかし、本事例のような探究学習に教員が伴走するには、ある程度の時間と労力が必要になることは否めない。今後は、意欲ある生徒が参加するボランティア活動を探究学習へと深化させるため、グローカルな視点で外部人材を活用しながら、生徒の学びを伴走する教育プログラムの体系化やそれを支える組織的な教育システムの構築が必要であると考える。